

平成 30 年 11 月 4 日

報道関係各位

公益財団法人水戸市芸術振興財団

「第 28 回吉田秀和賞」受賞者決定のおしらせ

拝啓 錦秋の候、貴下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、平成 2 年に創設されました吉田秀和賞は、優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として当財団が運営しております。

第 28 回目となりました今回は、昨年に引き続き審査委員に磯崎新氏と片山杜秀氏を迎え、厳正に審査を行ないました結果、候補書籍の総数 153 点（美術 55 点/音楽 40 点/演劇 20 点/映像 22 点/建築 13 点/その他 3 点）の中から、堀真理子著『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』— 演出家としてのベケット—』（藤原書店 2017 年 9 月刊）に決定致しました。

賞の贈呈式は、平成 30 年 11 月 25 日（日）午後 1 時 30 分から 2 時 30 分までの予定で、水戸芸術館会議場にて開催致します。ご取材の程どうぞよろしくお願い致します。 敬具

受賞者 : 堀真理子（ほり・まりこ 62 歳 1956 年 10 月生）
肩書き : 青山学院大学経済学部教授
連絡先 : メールアドレス : junsetsuan@gmail.com

[著者略歴]

堀 真理子（ほり・まりこ）

1956 年東京生まれ。青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻博士課程単位取得済退学。ロンドン大学 MA（演劇学）。2000 年度プリンストン大学客員研究員。現在、青山学院大学経済学部教授。専門は英米文学・演劇学。

主な著訳書に『ベケット巡礼』（三省堂、2007 年）、J・ノウルソン『ベケット伝』（共訳、白水社、2003 年）など。

公益財団法人水戸市芸術振興財団

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8

TEL 029-227-8111 FAX 029-227-8110

吉田秀和賞担当 大津良夫 川崎麻里子

[審査員選評]

磯崎 新

ヴラジーミル 何かしゃべってくれ！
エストラゴン 今探している。(長い沈黙)

『ゴドーを待ちながら』 サミュエル・ベケット

この科白が歴史的に構築されてきたドラマを崩した。

何もしないことが、時代の気分になった。その後、3世代の世界演劇人は崩壊したドラマの瓦礫をひろうことから出発することになる。ポストドラマ・ドラマの時代が今日まで続いている。

堀真理子は演出メモをテキストクリティックしながら、演出家「ベケット像」を描きだすのに対し、古川美佳は「慰安婦像」をポスト・コロニアル・ジェンダー問題として浮ばせる。同じくカルチュラル・スタディであるが、こちらにはポリティカル・コレクトネスとしての視点がみえる。金芝河が恨(ハン)を語る。朝鮮半島では、この枠組みが激変しているためではないか。

瓦礫をひろう行為だけをやって何もつくりえないベケット — 「非」

抑圧する旧制度に対抗して、静かに意志表示するローソク・デモ — 「反」

最後に残された二冊を比較して、私自身は冷戦終結までは「反」を、その後は今日まで「非」を方法にしてきたことに気付く。今回は、私個人のノスタルジアとして「非」の側をえらぶことにする。

片山 杜秀

「木のほかは何もかも死んでる」。『ゴドーを待ちながら』の幕切れ近くのヴラジーミルの台詞だ。ヴラジーミルとエストラゴンはゴドーを待っている。だが来ない。二人は木にズボンの紐をかけて首を吊ろうとする。だが失敗。二人は自殺を明日に延ばし、ゴドーをなお待つことにする。

これはいったい何？ 著者の読みはラディカルだ。ベケットの『ゴドーを待ちながら』に続く戯曲は『クラブ最後のテープ』も『勝負の終わり』も『しあわせの日々』も「地球上に残った最後の人間たち」を主人公にするが、ベケットは既に『ゴドーを待ちながら』でも「ポスト・カタストロフィ的な世界を想像していたことが推察できる」と。

なるほど。「木のほかは何もかも死んでる」ということは、植物のほかは人間も動物もほとんど滅亡しているということなのだ。恐らく核戦争で。そう、『ゴドーを待ちながら』は1953年に初演された芝居。翌年にはアメリカがついに水爆実験に成功する。米ソ冷戦と核兵器開発競争の下を生きる人間の根源的不安の尖鋭な表現として『ゴドーを待ちながら』は読み解ける。そしてその根本には、ベケット10歳のときのトラウマがあるという。第一次世界大戦下の1916年、アイルランドの独立を目指した対英武装蜂起は失敗に終わり、ダブリンの町は火の海と化す。そのカタストロフの記憶だ。

著者は、1916年から第三次世界大戦がついに勃発するかとも思われた1980年代までをカタストロフの淵に人間が追い詰められつづけた時代と把握し、そこに生きて虐げられる弱き人間のギリギリの声なき声、言葉なき言葉の演劇として、ベケットをとらえる。そして、ベケットの危機意識がますます有効な時代として、現在に想像力を巡らせる。学問的考証とアクチュアルな問題意識が交差しスパークする。人類滅亡時代の文学者であり演劇人としてのベケット像が切々と立ち上がってくる。あとがきに1954年の水爆大怪獣映画『ゴジラ』が出てくるのも嬉しい。ゴドーとゴジラは兄弟であったのか。

「吉田秀和賞」について

■対象 音楽・演劇・美術などの各分野で、優れた芸術評論を発表した人に対して

■正賞 表彰状 ■副賞 賞金 200万円

■審査委員 磯崎 新 建築家
片山 杜秀 評論家・慶應義塾大学法学部教授

■吉田秀和賞 受賞作品一覧

- 第1回（平成3年度） 秋山邦晴『エリック・サティ覚え書』青土社 1990年6月刊
- 第2回（平成4年度） 持田季未子『絵画の思考』岩波書店 1992年4月刊
- 第3回（平成5年度） 該当作品なし
- 第4回（平成6年度） 渡辺保『昭和の名人 豊竹山城少掾』新潮社 1993年9月刊
- 第5回（平成7年度） 松浦寿輝『エッフェル塔試論』筑摩書房 1995年6月刊
- 第6回（平成8年度） 長木誠司『フェルッチョ・ブゾーニ』みすず書房 1995年11月刊
- 第7回（平成9年度） 伊東信宏『バルトーク』中央公論社 1997年7月刊
- 第8回（平成10年度） 該当作品なし
- 第9回（平成11年度） 青柳いづみこ『翼のはえた指 評伝 安川加壽子』白水社 1999年6月刊
- 第10回（平成12年度） 小林頼子『フェルメール論 —神話解体の試み』八坂書房 1998年8月刊
小林頼子『フェルメールの世界 17世紀オランダ風俗画家の軌跡』
日本放送出版協会 1999年10月刊
- 第11回（平成13年度） 加藤幹郎『映画とは何か』みすず書房 2001年3月刊
- 第12回（平成14年度） 該当作品なし
- 第13回（平成15年度） 岡田温司『モランディとその時代』人文書院 2003年8月刊
- 第14回（平成16年度） 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモニュメント』
水声社 2004年7月刊
- 第15回（平成17年度） 宮澤淳一『グレン・グールド論』春秋社 2004年12月刊
- 第16回（平成18年度） 有木宏二『ピサロ／砂の記憶 —印象派の内なる闇』人文書院 2005年11月刊
- 第17回（平成19年度） 該当作品なし
- 第18回（平成20年度） 片山杜秀『音盤考現学』アルテスパブリッシング 2008年2月刊
片山杜秀『音盤博物誌』アルテスパブリッシング 2008年5月刊
- 第19回（平成21年度） 岡田暁生『音楽の聴き方』中央公論新社 2009年6月刊
- 第20回（平成22年度） 白石美雪『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』
武蔵野美術大学出版局 2009年10月刊
- 第21回（平成23年度） 椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』
アルテスパブリッシング 2011年9月刊
- 第22回（平成24年度） 新関公子『ゴッホ 契約の兄弟 フィンセントとテオ・ファン・ゴッホ』
ブリュッケ 2011年11月刊
- 第23回（平成25年度） 末永照和『評伝ジャン・デュビュッフェ アール・ブリュットの探求者』
青土社 2012年10月刊
- 第24回（平成26年度） 通崎睦美『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』講談社 2013年9月刊
- 第25回（平成27年度） 榎木野衣『後美術論』美術出版社 2015年3月刊
- 第26回（平成28年度） 立花隆『武満徹・音楽創造への旅』文藝春秋 2016年2月刊
- 第27回（平成29年度） 平芳幸浩『マルセル・デュシャンとアメリカ—戦後アメリカ美術の進展とデュシャン
受容の変遷—』ナカニシヤ出版 2016年7月刊
- 第28回（平成30年度） 堀真理子『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』—演出家としてのベケット—』
藤原書店 2017年9月刊